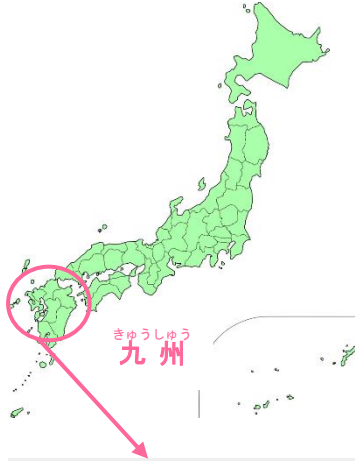


きつちよむ はなし
吉四六さんの話

ふね かね
～舟のお金～





おおいたけん
大分県



のつまち
野津町

むかし おおいたけん の つまち いま おおいたけんうす き し
昔、大分県の野津町（今の^い大分県臼杵市
の つまち きつちよむ おとこ
野津町）に、吉四六さんという男がいまし
た。

きつちよむ あたま
吉四六さんは、頭がよくて、いつもおも
しろい話をしていました。その話にみんな
はなし はなし
が笑いました。みんなは楽しくておもしろい
わら たの
が笑いました。みんなは楽しくておもしろい
きつちよむ だいす
吉四六さんが大好きでした。



ある日、吉四六さんが舟のそばで客を待っている
と、旅をしている侍がやってきて、
聞きました。

「川の向こうまでいくらだ？」



「片道、8文です」

*「文」は昔のお金です。1文は25円ぐらいです。

「8文は高い。6文にしろ。」



さむらい かたな も
侍は刀を持って
いて、強^{つよ}そう^{ひと}な人
でした。

きつちよむ すこ かんが さむらい
吉四六さんは、少し考えました。そして侍
から6^{もん}文^{しゅっぱつ}も^らって、出^{しゅ}発^{ぱつ}しました。

さむらい こわ かお いそ い
侍は怖い顔で「急げ」と言いました。





もうすぐ着^つきます。そのとき、吉四六^{きつちよむ}さんは、舟^{ふね}を止^とめて言^いいました。

「ここまでが6^{もん}文^{もん}です。」

「？」

「ここから向^むこうまで行^いくのに、あと2^{もん}文^{もん}
足^たりません。」

「向こうまで行けないなら、^{もと}元の^{ぼしょ}場所^{もと}に戻れ。」

「はい、わかりました。」



きつちよむ 吉四六さんは、もと ぼしょ もど 元の場所に戻りました。

「ここまで戻ってきたのですから、かえ 帰りの

かたみち もん ねが 片道6文をお願いします。」



ちよしや すみだ たまき
著者 住田 環

おおいたはつ よ かい かいいん
(大分発わくわく読みものをつくる会 会員)

きょうりょく たげんごたどく
協力 NPO多言語多読 (<https://tadoku.org>)

イラスト かとう もりひろ
加藤 守弘

さんこうしりょう
参考資料

こぐれまさお
木暮正夫 (1989) 「ふねのわたしちゃん」, 『これはナルホド

きつちよむ 話』(日本のおばけ話・わらい話 9), pp.9-13,

いわさきしよてん
岩崎書店

ほん なか にじしろう きん
この本の中のイラストの二次使用を禁じます。

